

主 題：「ベツレヘム」が明らかにするクリスマスの意味**聖書箇所：ミカ書5章2節****テーマ：救い主の誕生地である“ベツレヘム”が私たちに教えてくれることとは？**

さて、これから私たちはいつものように、神様のことばである聖書から一緒に学んでいくのですが、その前にきょうはまず考えてほしい質問があります。これまで皆さんがもらったクリスマスプレゼントの中で、一番嬉しかったものはどんなものだったでしょう？何か考えました？では次、一番驚いたものはどんなものだったでしょう？では、一番がっかりしたものはどんなものだったでしょう？ないかもしれませんが・・・おそらく今それぞれの頭にいろんな答えが浮かんでいるのではないかと思います。では最後にもう一つだけ質問です。皆さんはそのプレゼントが自分にとって嬉しい、驚いたと感じたのですが、そう気づいたのはどのタイミングだったのでしょうか？おそらくこれはみな同じではないかと思えます。それは、私たち自身がプレゼントを開けて、そしてその中身を見た時ですよね。たとえどんなにきれいなラッピングがされていたとしても、私たちはそれだけでは中に何が入っているのかはよくわかりません。プレゼントを手にとってみて、必死に中身を当てようとして目を凝らしたとしても、周りをしっかりと包装されていれば、私たちには全然わからないのです。当たり前のように聞こえるかもしれませんが、でもそうですよね。プレゼントは周りのラッピングを剥がして実際に開けて初めて、それがどん物なのかを知ることができます。だからもし私たちがもらったプレゼントが包装されていれば、私たちはそれをそのままただじっと眺めていたり、外側だけで一生懸命に中に何が入っているのだろうかを推測するようことはしないのです。

私たちは普段はそんなことはしませんが、時にこんな態度を取っていることがあります。実際の中身に目を留めることなく、外側だけであたかも中身のものを理解したと、そう満足してしまうことがあります。いったい何に対してか？それは神様が与えてくださった最高の贈り物に対してです。救い主イエス・キリストに対してです。どうですか？少し自分のこととして考えてみてください。特にこのクリスマスシーズン、私たちはいろいろな場面で救い主の誕生を覚えるような賛美を歌ったり、みことばを見ることもあります。これまでに何度も聞いたことがある慣れ親しんだクリスマスのストーリーを私たちは繰り返し、繰り返し耳にします。するとどうなるかと言えば、あまりにもその内容をよく知っているのです。時に私たちは自分がすでにその中身のすべてを知っているかのように思い込んでしまうことがあるのです。そこにある本当の意味や価値に気づく前に、ただ周りの包装を見て、勝手に自分でその意味や価値を判断してしまうことがあるのです。そして結果として、神様から与えられたその最高の贈り物が、何か当たり前なものに感じることもあるのです。与えられたものはあまりにも凄すぎるものなのに、次第に私たちは感謝に薄れ、そして心からそれを喜んでいない、そんな自分の状態に繋がることもあります。

果たして皆さんは今、イエス・キリストの誕生を心から喜んでいるでしょうか？救い主の誕生の知らせは、それぞれの心に今まさに賛美や感謝をあふれさせているのでしょうか？もしかすると、キリストの誕生というものが、今最高の喜びではなく、単なる一つの出来事になっている人がいるかもしれません。また、私には何の意味もない関係のないものだ、と思っている人もいるかもしれません。だからこそきょうこの時間を通して、一度一緒に改めて考えてみましょう。

私たちがきょう見ていくのはミカ5：2のみことばです。このみことば自体は、多くの人がこれまでに一度は読んだことのある有名な箇所の一つかと思えます。ご存じの方もいると思いますが、実際に約束の救い主が生まれる700年前、「この方がベツレヘムの町で誕生する」という預言が、このミカ

5 : 2には記されていたのです。「ベツレヘムで生まれる」と。でも皆さん、今“ベツレヘム”と聞いて、何も思わないかもしれません。だから改めて考えてみてください。そもそも、いったいなぜベツレヘムだったのでしょうか？ どうして救い主の誕生は、ほかの町ではなかったのでしょうか？ もちろんこれには大切な意味がありました。“ベツレヘム”は私たちが見過ごしてはならない、クリスマスに関する少なくとも重要な二つの事実を教えてください。では、いったいそれは何だったのかを、みことばから見ていきましょう。

ミカ5 : 2

「ベツレヘム・エフラテよ。あなたはユダの氏族の中で最も小さいものだが、あなたのうちから、わたしのために、イスラエルの支配者になる者が出る。その出ることは、昔から、永遠の昔からの定めである。」

○ “ベツレヘム” が明らかにする意味 : 二つの事実

1. 神様は並ぶ者のないほど偉大なお方 2 a 節

さてまず一つ目に“ベツレヘム”が明らかにしてくれる事実、それは、「神様はほかに並ぶ者のないほど偉大なお方」だということです。このような神はほかにいません。比べられる存在もいません。ほかに並ぶ者なんていっさいいない、聖書の神様はそんな大いなるお方であるのだと、“ベツレヘム”は私たちに教えてくれるのです。

▶ 「最も小さいもの」

2節はこのように始まっていました。「ベツレヘム・エフラテよ。あなたはユダの氏族の中で最も小さいものだが、」ここで神様は“ベツレヘム”のことをはっきりと「ユダの氏族の中で最も小さいもの」と言い表していました。「最も小さいもの」と聞けば、単純に町の大きさの話をしているのかなと思う人がいるかもしれませんが、大きさも表しますが、実はこのことばには、それ以上の意味が含まれていました。というのもこのことばは旧約聖書を通して23回登場しますが、その多くが、大きさではなくて、「あるものの力や威厳のなさ、弱さ」を表すのに用いられていました。例えばIサムエル9 : 21を見てみると、このように書いていました。「サウルは答えて言った。「私はイスラエルの部族のうちの最も小さいベニヤミン人ではありませんか。私の家族は、ベニヤミンの部族のどの家族よりも、つまらないものではありませんか。どうしてあなたはこのようなことを私に言われるのですか。」」ここで使われていた「つまらないもの」というのが同じことばになります。またもう一つだけ詩篇119 : 141を見てみると、そこにはこう書いていました。「私はつまらない者で、さげすまれています。…」ここに出てきた「つまらない」が同じことばになるのです。ですから、このことばは、力を持っていない弱いもののこと、小さいもののこと、さらに言うなら、その弱さのゆえに周りから軽く扱われるような、さげすまれるようなそんな存在を表すものだったということです。神様はそんなことばをベツレヘムに対して使っておられました。

神様はいったい何を言わんとしておられたのでしょうか？ それは明白でした。ベツレヘムの町というのは、それほどまでに弱く、重要でない、軽く扱われるような小さな存在だったということです。だからこそ普通に考えれば、そんな小さな町からイスラエルの支配者となるような者が、約束の救い主が出ることなんて到底ありえなかったのです。もし当時の人がそんな話を耳にしたとすれば、すぐにだれもが耳を疑うような内容でした。ベツレヘムから出るんですか？ だれがですか？ イスラエルの支配者？ すみませんがそもそもベツレヘムってどこですか？ ・ ・ ・ そういった力や名誉も持っていない、取るに足りない最も小さな町から、最も優れたお方が生まれるなど、だれにも想像すらできないことだったのです。

でももし、そんな町から優れた者が出るのだとしたら、何が言えると思います？ それはただ、ほかに並ぶ者のない偉大な神様のみわざのゆえでしかない、ということです。考えてみてください。偶然なものは一つとしてありません。人々が思い描きやすいような、そんな力や富にあふれた重要な場所ではありませんでした。神様は文字通り何もない場所を救い主の誕生の地として選ばれました。こうしてだれも知らないような小さな町を通して、ただご自分だけが約束を成し遂げる力があるのだということを、

大いに示されたのです。“ベツレヘム”それは測り知ることのできない神様の偉大さを私たちに教えてくれるものだったのです。

さて、どうでしょう？これだけでも凄いことだと思いませんか？今ベツレヘムに心を留める時、果たして私たちはそこに明らかにされた神様の偉大さというものを覚えているのでしょうか？最も小さいその町から救い主を与えると約束された、ほかに並ぶ者のない神様の力というものに、今驚きを覚えているのでしょうか？でもね、皆さん、同時にもし私たちがここで立ち止まってしまうのなら、私たちはまだその偉大さのすべてを目の当たりにできているとは言えないかもしれません。

●ミカ書全体：大きな流れの中の“ベツレヘム”

実を言えば、“ベツレヘム”は神様の凄さをさらに鮮明に私たちに教えてくれていました。そしてそのことをよく理解するために少し視野を広げて考えてみましょう。今私たちはミカ5：2その一部分だけを見たのですが、今度はミカ書の全体に目を向けてみましょう。そして皆さん、全体の大きな流れの中において、この箇所がいったいどんな意味を持っていたのかということを考えてみてください。ただ、この限られた時間の中で詳細のすべてを見て取ることはできませんので、それはまた別の機会にします。ただ全体の流れ、文脈というのは重要なことを私たちに明らかにしてくれていたのです。ですからミカ1章を見ていきます。ミカ1：1はこんなことばで始まっていました。「ユダの王ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの時代に、モレシエテ人ミカにあった【主】のことば。これは彼がサマリヤとエルサレムについて見た幻である。」と記されていきました。このミカという人物は、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤという紀元前8世紀頃に君臨していた三人の王様の時代に活躍したひとりの預言者でした。そして少し頭に入れておいてください。この”ミカ”という名前には、「だれが神のようであろうか」という意味が含まれていました。「だれが神のようであろうか」を言い換えれば、「神のようなものはだれもない」ということです。そんな名前を持つミカが、ほかの預言者と同じように神様からのことばを大胆に人々の間で語り続けていたのです。それがミカ書の中に書かれていることでした。ではいったいどんなことばを彼は宣べ伝えたのでしょうか？2-4節までを見ると、ミカはこのように語っていました。「:2 すべての国々の民よ。聞け。地と、それに満ちるものよ。耳を傾けよ。神である主は、あなたがたのうちで証人となり、主はその聖なる宮から来て証人となる。:3 見よ【主】は御住まいを出、降りて来て、地の高い所を踏まれる。:4 山々は主の足もとに溶け去り、谷々は裂ける。ちょうど、火の前の、ろうのように。坂に注がれた水のよう。」ミカは「聞け。」「耳を傾けよ。」と人々に対して熱心に呼びかけていました。どうしてだったか？それは恐ろしいことに、神である主が天から地上にやって来られ、そして人々の上にさばきをもたらされるからでした。そのさばきというのは圧倒的な力によるものでした。4節に書いていましたね。「山々は主の足もとに溶け去り、谷々は裂ける。」と。聖なる神様がもたらされるそのさばき、正しいさばきというのは厳しいものでした。それが下されるのだと言っていたのです。

でもいったいどうして神様はこんなにも厳しいさばきを下されるのでしょうか？単なる気まぐれでそんなことをしようとされたのでしょうか？いいえ、そうではありません。5節を見ると「これはみな、ヤコブのそむきの罪のため、イスラエルの家の罪のためだ。」と書いています。なぜ神様がさばきを下されようとしていたのか、それはただ人々の罪の結果でした。本来ならこの当時のイスラエルやユダの民たちは、神様だけを愛して、神様のことばにのみ従うべきそのような存在でした。でも彼らは、神様を捨てていたのです。神様に逆らって高慢になり、加えて神様以外の偶像を愛して、それらに自分たちの助けや喜びを見出していました。もちろん罪を忌み嫌っておられる神様が、そんな彼らをずっと見逃されることはありませんでした。彼らの背きの罪が、正しい神様のさばきをその上にもたらすことになったのです。ミカはその知らせを人々の間で宣べ伝えていました。「聞きなさい」と。「神様の正しいさばきが、厳しいさばきがやってくる」と。

でもここで興味深いことがあります。それは、この神様のさばきというものが、ただその厳しさだけのものではなかったということです。そうではなくて、このさばきは同時に人々に対して、あることを示すものでもありました。何かを示していたのです。いったいどういうことか？続きを見ていと、1：10-11「：10 ガテで告げるな。激しく泣きわめくな。ペテ・レアフラでちりの中にころび回れ。：11 シャフィルに住む者よ。裸で恥じながら過ぎて行け。ツァアナンに住む者は出て来ない。ペテ・エツェルの嘆きは、あなたがたから、立つ所を奪い取る。」この箇所には、ガテとかペテ・レアフラとかシャフィルといったいろいろな町の名前が挙げられていました。いったい何のことだろうと思うでしょう。でもこれは非常に大切なことを教えてくれていたのです。これらの町こそ、まさに当時の人たちが助けを見出そうとしていた場所だったのです。イスラエルは神様を見捨てて、このような町に自分たちの力を求めようとしていました。だからこそよく見てください。そんな町々に対して神様が何をなされていたか。例えばペテ・レアフラの町について、このペテ・レアフラという名前には「ちりの家」という意味がありました。そんな家に向かって主は言われたのです。「お前たちがちりの中にころび回れ」と。シャフィルという町もありました。この名前には「美しい」とか「喜ばしい」という意味がありました。美しい町の象徴だったのです。でもそんな町に向かって主は言われるのです。「裸で恥じながら過ぎて行け。」と。ツァアナンと言う町がありました。この町には「出発する」とか「出る」という意味がありました。そんな町に向かって「ツァアナンに住む者は出てこない。」と主は言われるのです。

神様はいったい何をなされていたのか見えてきますか？ここで挙げられていた町々は、人々が助けや喜びを見出そうとしていた場所でした。神様を捨てて、彼らは別のものを通して必要な力を得られると思っていたのです。でも、そんな町に対して神様がされたこと、それは、それらの町が持っている力や名誉、そういったすべてのものを取り上げられていたというわけです。こうして神様は、「だれが神のようであろうか」「神に並ぶような者はだれもいない」とはっきり示されたのです。神様のさばきというのはただ厳しいだけのものではありませんでした。神様の偉大さというものを人々に示すものだったのです。

でもこれでことばは終わってはいませんでした。神様のさばきは人々に対するものだけではなく、それだけでなく影響力や富を持つ有力者たちに対してもそのさばきは続いています。2：1-3を見ると、そんな影響力や富を持っている有力者たちに対してのさばきが記されています。「：1 ああ。悪巧みを計り、寝床の上で悪を行う者。朝の光とともに、彼らはこれを実行する。自分たちの手に力があるからだ。：2 彼らは畑を欲しがって、これをかすめ、家々をも取り上げる。彼らは人とその持ち家を、人とその相続地をゆすり取る。：3 それゆえ、【主】はこう仰せられる。「見よ。わたしは、こういうやからに、わざわざを下そうと考えている。あなたがたは首をもたげることも、いばって歩くこともできなくなる。それはわざわざの時だからだ。」」本来なら富や権力を持っているリーダーたちは、神様を愛し、隣人を愛し、隣人の必要を満たすそのような歩みをすべき模範となるべき存在でした。でもそのようには歩いていませんでした。彼らが行っていたのは全くの真逆だったのです。彼らは夜寝る時には寝床の上でいつも悪に思いを巡らせていました。夜だけではなくありません。朝起きれば、朝には喜んでそれを実行していたのです。一日中悪をはびこらせていました。その貪欲さのゆえに、彼らは人々のものを絶えず欲しがって、それを取り上げてもいたのです。富を持っているリーダーたちはいつも悪巧みを図っていました。自分たちにはそれをするのできる力があるのだと考えていたのです。

そんな者たちに神様が何をなされたのか？神様はその者たちに対して3節でこう言われていました。「見よ。わたしは、こういうやからに、わざわざを下そうと考えている」と。己の成功や富を追い求めているリーダーたちはいつも悪を策略していました。いろんな考えによって悪を行い続けていたのです。でもそんな彼らの策略も考えも、神様の考えの前では何にもなりません。ほかのだれでもない神様が

彼らをさばき、そしてそのすべてを取り上げるのだというわけです。こうして神様は「だれが神のようであろうか」「神に並ぶようなものはだれもいない」と、はっきりと示されているのです。

でもそれで終わりではありませんでした。神様のさばきは人々やまた影響力や富を持つ有力者だけのものではなくて、今度は国の政治的リーダー、いろんな頭に対してのものでもあったのです。続く3章はこのように始まっていました。3：1-4「1 わたしは言った。聞け。ヤコブのかしらたち、イスラエルの家の首領たち。あなたがたは公義を知っているはずではないか。2 あなたがたは善を憎み、悪を愛し、人々の皮をはぎ、その骨から肉をそぎ取り、3 わたしの民の肉を食らい、皮をはぎ取り、その骨を粉々に砕き、鉢の中にあるように、また大がまの中の肉切れのように、切れ切れに裂く。4 それで、彼らが【主】に叫んでも、主は彼らに答えない。その時、主は彼らから顔を隠される。彼らの行いが悪いからだ。」本来なら人々を導く指導者たちこそ、何が公正で正しいのか、その意味を知っているはずでした。彼らは、神様の前に何が公義なのかを知らないわけではなかったのです。だからこそ3：1で「あなたがたは公義を知っているはずではないか。」と言われていました。あなたがたは正しいことを知っているでしょ、と。でもそんな彼らがしていたことは、善を憎み、悪を愛し、弱い者たちを虐げていたのです。神様のことばに従って正しいことを行っていくことよりも、民を食物にして私利私欲をむさぼっていました。彼らは、必死になって助けを求める弱い人々の叫び声にも耳を傾けようとしなかったのです。だからこそ、そんな者たちに神様は何をなされるのかを、ミカを通してはっきり言っておられたのです。「それで、彼らが【主】に叫んでも、主は彼らに答えない。」と。「たとえその者たちが叫び声を上げたとしても、わたしは彼らにいっさい答えない。たとえ彼らが困って助けを求めたとしてもわたしは御顔を隠してその叫びに耳を傾けることはないのだ。弱い者たちを貪って、弱い者たちからいろんなものを取り上げて、その者たちの叫び声を聞かなかった者たちには、神様はその者たちの叫び声さえも聞かない。」と。ですからどれだけ権力や名誉を持っているような国のリーダーであったとしても、神様の前では何にもなりません。ほかのだれでもない神様が彼らをさばき、そのすべてを無にされるのだというわけです。そしてここで、神様がはっきりと示されていたことに気づきますね。「だれが神のようであろうか」「神に並ぶような者はだれもいない」と。“預言者ミカ”「だれが神のようであろうか」というこの名前を持つミカは、最初から重要なメッセージを人々の間で宣べ伝え続けていました。

今見てきたように、当時の人たちは神様を捨てて、別のものに自分たちの助けや力を見出そうとしていました。有力者や国のリーダーたちも同じです。神様を愛するのではなく、神様に従わず逆らい、罪を犯し続けていました。まさに悪や問題があちこちで横行していたのです。でもそんな状況の中で、ミカは言い続けていました。「聞きなさい。耳を傾けなさい。だれが私たちの神のようであるでしょうか。悪に対して必ず報いられるその神は、すべてのことを正しくさばかれます。そして同じ神は、あなたがたの罪をも正しくさばきます。だからこそ、この神に立ち帰りなさい。この神に並ぶような者がほかにいるでしょうか。」と。これが大まかな1-3章の内容でした。さばきが来ると教え続けていたのです。

ここまで聞いてきてどうでしょう。確かに非常に厳しいことが言われていました。これを聞いていた当時の人々の様子を想像してみてください。もちろんこのミカのことばを何度も何度も耳にしても変わらず頑なになって神様に逆らい続けた者たちも大勢いたでしょう。でも同時に、悪が横行するその中にあったとしても、神様を恐れて神様のことばに忠実に歩もうとした者たちはいたのです。そのような者がたださばきのメッセージだけを聞いたとすれば、間違いなく彼らは喜びを見出すことに難しさを覚えたでしょう。必ずやって来るというそのさばきですべて終わりだったとしたら、容易に希望を失ってしまったことでしょう。だからメッセージはここで終わってはいませんでした。神様はミカを通して、さばきだけではなく、すばらしい将来の希望をも教えておられるのです。

それがまさに4章から記されていた内容でした。4:1-3を見ると、将来の希望に関してミカはこのように言っています。「:1 終わりの日に、【主】の家の山は、山々の頂に堅く立ち、丘々よりもそびえ立ち、国々の民はそこに流れて来る。:2 多くの異邦の民が来て言う。「さあ、【主】の山、ヤコブの神の家に上ろう。主はご自分の道を、私たちに教えてくださる。私たちはその小道を歩もう。」それは、シオンからみおしえが出、エルサレムから【主】のことばが出るからだ。:3 主は多くの国々の民の間をさばき、遠く離れた強い国々に、判決を下す。彼らはその剣を鋤に、その槍をかまに打ち直し、国は国に向かって剣を上げず、二度と戦いのことを習わない。」神様ははっきりと約束されていました。「これから先、やがてやって来るその終わりの日、その日には主の家の山、言い換えれば、新しいエルサレムが再び建てられ、そして王である主が王座に着き、すべてのものを支配するようになる。その日にはもう国が国に剣を挙げることもなく、二度と戦いのことを習う必要もない。人々の間に完全な平和がもたらされる。そんな日がやって来るのだ。」と。こうして主の民には、どんな時も喜びにあふれて、世界のすべてを統治されるその偉大な主といつまでもともにいることができるという、そんな最高の時が待っていました。確かにミカが言うように今は厳しいさばきが迫っていました。彼らは大いに苦しまなければいけませんでしたが、でもそれで終わりではなくて、そのさばきからの救いが、またその先の将来にすばらしい約束が待っているのだ、と言われていたのです。それが皆さん、主に従順に従う者たちに与えられた、彼らが抱き続けることのできる希望だったのです。そしてこの将来の約束は、さばきを目の前にした彼らのうちにいったいどれほど大きな励ましや慰めをもたらしたことでしょう。さばきは確かにやってくる、でもそれで終わりではなく、先に祝福が待っている。…それが言われていたことでした。

でも、それでもなお、中にはまだ不安でこう思った者たちもいたでしょう。神様の約束はすばらしい、でも本当にこの約束は成し遂げられるのだろうか？さばきから助け出して、こんなにも最高の時を本当に神様はもたらすことができるのだろうか？私たちの神様にはそのような偉大な力があるのだろうか？と。そんな問いに神様はどう答えられたと思います？いったいどのようにして神様は、ご自身が大きい力を持っているお方だということを明らかにされたと思います？実際には何の力もないようなこの世の有力者や王とは全く異なる存在であることを、どのように示されたと思います？その答えはシンプルでした。神様は「ベツレヘムからイスラエルの支配者となるものを立てる。」と言われていたのです。だれにも知られていないようなそんな小さな町から、人の力では絶対にありえないようなそんな場所から、真の救い主となる者が、王となる者が現れると、神様は約束されたのです。そうして神様ははっきりと示されました。「だれがわたしのようであろうか」「わたしに並ぶような者はだれもない」と。

改めて考えてみてください。すべてのことが偶然ではありません。力や富にあふれた重要な場所を選んだではありませんでした。神様は文字通り何も無いような場所を救い主の誕生の地として選ばれました。だれにも想像できないそんな小さな町を通して、ただご自分だけが約束を成し遂げる力がある、ということを示されたのです。まさに神様こそほめたたえられるべき、並ぶ者など一つもない唯一のまことのお方でした。”ベツレヘム”これは、測り知ることのできない神様の偉大さというものを私たちに教えてくれるものでした。これこそが明らかにされたクリスマスの重大な意味だったのです。

果たして私たちが今ベツレヘムに心を留めるとき、そこに明らかにされた神様の偉大さを正しく覚えているのでしょうか？最も小さな町から救い主を与えると約束された、ほかに並ぶ者のない神様の力に、今私たちは正しい驚きや感謝を覚えているのでしょうか？この“クリスマス”、もしかすれば時に私たちはあまりにもすばらしい贈り物にだけに目を取られて、贈り主の偉大さを忘れていたかもしれません。でも、もしそうなら決して忘れてはいけません。私たちの神のようなお方はほかにはいないということです。比べられるものも存在しません。この神様にできないことは何一つなく、昔も今もそしてこれから先も、すべてのことをご自分の意のままに行ってこられたように、必ずご自分の意のままに成し遂げられるお方だということです。だから皆さん、私たちがベツレヘムを覚えるなら、そこに偉大さを見る

のなら、こんな偉大な神様を心から愛し従っていくことです。この方に正しい恐れを抱いて、ふさわしい賛美をもって歩いていくことです。

かつて詩篇の著者もこのように口にしていました。詩篇 86 : 8-11 にこう書いています。「:8 主よ。神々のうちで、あなたに並ぶ者はなく、あなたのみわざに比ぶべきものはありません。:9 主よ。あなたが造られたすべての国々はあなたの御前に来て、伏し拝み、あなたの御名をあがめましょう。:10 まことに、あなたは大きいなる方、奇しいわざを行われる方です。あなただけが神です。:11 【主】よ。あなたの道を私に教えてください。私はあなたの真理のうちを歩みます。私の心を一つにしてください。御名を恐れるように。」神様はほかに並ぶ者などない偉大なお方。それが一つ目に、ベツレヘムが明らかにしてくれるクリスマスの意味でした。

2. キリストは並ぶものがないほどへりくだられたお方 2 b 節

そして最後にもう一つ、ベツレヘムが明らかにする事実の二つ目は、「キリストは並ぶ者がないほどへりくだられたお方」だということです。もう一度きょうのテキストに戻ると、2 節の続きにこのように書かれていました。「あなたのうちから、わたしのために、イスラエルの支配者になる者が出る。その出ることとは昔から、永遠の昔からの定めである。」ここで用いられていた支配者ということばですが、この支配者ということばはまさに文字通り「何かを支配する者、統治する者」を表していました。ですからベツレヘムで誕生するとされていたキリストは、間違いなくそれにふさわしい力や権威を持っている存在でした。でも皆さんに気づいてほしいのは、キリストは単なる支配者ではなかったということです。そうではなく、ミカはここで特に二つの説明を加えていました。キリストは単に支配するお方ではなく、特別な支配者でした。いったいどんなふうなのでしょう。

こう書いていましたね。「あなたのうちから、わたしのために、イスラエルの支配者になる者が出る。」まず一つ目に言えるのは、キリストは、「わたしのために」、言い換えれば、神様のために働くそんな主権者だということです。そんな選ばれた王だということです。「わたしのために」と。思い返してみれば、イエス様ご自身もこの世に来てから後に繰り返し言われていました。ヨハネ 4 : 34 を見ると、イエス様はこう言っておられたのです。「…「わたしを遣わした方のみこころを行い、そのみわざを成し遂げることが、わたしの食物です。」と。また同じヨハネ 6 : 38 を見ればこう書いていました。「わたしが天から下って来たのは、自分のこころを行うためではなく、わたしを遣わした方のみこころを行うためです。」そしてそのことばの通りに、イエス様は確かに最初から最後まで神様を喜ばせることを行い続けていました。かつて存在していたこれまでのどんな支配者たちとも違います。彼らは神様の前に罪を犯して、完全に神様を喜ばすことなど到底できませんでした。でもこのお方は、神様のみこころを求めることによって完璧であられたのです。キリストだけがこの神様を一番に愛し、そしてすべてのことにおいて神様の栄光を現されました。まさにキリストは、並ぶ者のない支配者でした。

でもそれだけではありません。「支配者になるものが出る」の後、「その出ことは昔から、永遠の昔からの定めである。」もう一つ言えるのは、キリストは昔から、永遠の昔から来られることが定まっていた、そんな主権者だということです。そんな選ばれた王だということです。昔からでした。残念ながら時に勘違いしてしまうこと人があります。人として地上に来られる前のイエス様はどこにも存在していなかったと。でも聖書はそんなことはいっさい宣べていませんでした。例えばコロサイ 1 : 17 節を見ても、そこには「御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。」とされていますし、またヨハネ 1 : 1-2 にも「:1 初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。:2 この方は、初めに神とともにおられた。」と書いていました。確かにイエス様は、赤ん坊として生まれるそのはるか前から変わらずに存在しておられたまことの神様でした。永遠の昔から神様であられるそのようなお方が、神様の約束を成就するためにやって来られたのです。決して人にはできないことも、完全な神様であり、また完全な人であるそのイエス様には成し遂げることができました。まさに

キリストは、並ぶ者のない支配者だったのです。ほかに比べることのできないそんな偉大な力を持った救い主でした。

そして「そんな圧倒的な力を持った支配者がベツレヘムから出る」と言われていたのです。だれも知らない最も弱く小さな町に、最も優れた方がお生まれになるのだというわけです。皆さん、いったいどれほどこの方がへりくだられたのかをここに見ることができません？永遠に変わらないまことの神様が、小さな赤ん坊として来られるだけではありません。この方は最もさげすまれるようなそんな小さな町から出られるというわけです。お城でもありませんでした。立派な屋敷でもありませんでした。何千人の家来やしもべがすぐそばにいて仕えるようなそんな家でもありませんでした。ベツレヘムの町で宿屋さえ与えられず、飼葉おけに寝かされたのです。このようにしてキリストは最初からご自身を低くして、人々に仕える者として来られたということを明らかにされました。私たちが罪から救うためにこの地上に来てくださったこのお方は、並ぶ者のないほど偉大なお方にもかかわらず、並ぶ者のないほどへりくだられたお方だったのです。

どうでしょう？果たして私たちが今ベツレヘムを覚えるときに、そこに明らかにされたキリストのへりくだりに正しく目を留めているのでしょうか？最も小さな町に救い主として来てくださった、そんなほかに並ぶ者のない主のその偉大さに、今感謝を、喜びを表しているのでしょうか？最も小さな町“ベツレヘム”は、私たちにあまりにも巨大な事実を教えてくれました。どれもが偶然ではありません。ほかに並ぶ者のない偉大な神様は、その地をみずから選ばれました。そしてそこからやって来られる救い主こそが、ご自身をへりくだらされた王の王、すべてを支配される偉大な支配者となるお方でした。

このような偉大な神様、このような偉大な救い主を私たちが覚えるのだとすれば、皆さん、今私たちはどこに喜びを見出そうとするのでしょうか？いったい私たちはどこに満足や慰めを見出そうとするのでしょうか？また何より、いったいどこに罪からの救いを求めようとするのでしょうか？歴史がはっきりと教えてくれたように間違いなく言えることは、もし今なおここに神様以外のものを愛して頑なに神様に逆らい続けている人がいるなら、聖なる神様のそのさばきは必ずそんなあなたのもとにもやって来るということです。でもまだ救いはあります。ですからどうかきょうというこの日に、私やあなたのような罪人のためにこの地上に来てくださって、ご自分のいのちを十字架でささげてください、あわれみ深いイエス・キリストの助けを求めてください。この方を自分の救い主として、また主と信じ受け入れてください。ありえないほどの犠牲を払ってくださった偉大な救い主を心から信じるなら、そんなあなたにも救いが与えられるとみことばは約束してくれています。この方のうちに本当の喜びがあります。

また最後に兄弟姉妹の皆さん、私たちが愛している神様、この神様のようなお方はほかにはいません。比べられるものも何一つとしてありません。この神様にできないことは、これまでもありませんでした。そしてこれから先も何一つとしてありません。だからこそ、この神様とともに歩むことができるのです。感謝なことだと思いませんか？そしてその真理を、クリスマスは私たちに思い出させ続けてくれるのです。“最も小さなベツレヘム”が、私たちがいつも希望を見出すことのできる揺るぐことのないその真理を、事実を、意味を教え続けてくれるのです。そうだとすればこのクリスマスのシーズン、この偉大な神様を正しく覚えて、そして感謝をもって歩み続けていきましょう。約束の救いの主として来られたそのお方に心からの賛美をささげる者として、続けてともに歩んでいきましょう。